

楽屋
―流れ去るものはやがてなつかしき―

清水邦夫

女優 A
女優 B
女優 C
女優 D

1

闇。

なつかしい音楽がはじまると同時に、数枚の鏡がきらきら光を放ちはじめる。

鏡がささやく。

「……日々のいのちの営みがときにあなたを欺いたとて、悲しみを又いきどおりを抱かないで欲しい。悲しい日々には心をおだやかに保てば、きっとふたたびよろこびの日が訪れようから。

……こころはいつもゆくすえのなかに生きる。いまあるものはすずろに淋しい思いを呼び、ひとの世のなべてのものは、束の間に流れ去る。そして、流れ去るものはやがてなつかしいものへ……」

2

闇のしじまから、いつの間にか女優A・Bが現われて、鏡に向って、メイクアップをはじめ。

かなり……熱心にその作業に没入する、女優Aの眼はなぜか焼けただれており、視力は充分ではないらしい。

一方、女優Bののどには、白いホータイが巻かれ、鮮血が滲んでいる。

メイクに没入する二人の姿は、きわめて真剣であり、どこか滑稽でもあり、そしていささか哀しい風情がある。

突然、大きな鏡（姿見）の前に、女優Cが立つ。

女優Cは、「かもめ」のニーナの扮装。手には火のついた煙草。

女優C わたしは……かもめ。いいえ、そうじゃない、わたしは女優。そ、そうよ！

ゆっくりと明りが入る。

と、そこはごくありふれた楽屋。

彼女は出番前のセリフの稽古をしているのだ。

メイクする女優A・Bは、女優Cに全く無関心のように、自分たちの作業に没頭する。

女優C ……あの人が来てる？ ふん、構いやしない、そうよ、あの人は芝居というものを信用しないで、いつもわたしの夢を嘲笑あざわらっていた。それでわたしもだんだん信念が失うせて、気落ちしてしまったの……そのうえ、恋の苦労だの、嫉妬だの、赤ちゃんのことでしょっちゅうびくびくしたりで、わたしはこせついた、つまらない女になってしまっただけで、でたらめな演技をしていたわ。両手の持て扱い方も知らず、舞台上で立っていることもできず、声も思うようにならなかった。ひどい演技をやってるなど自分で感じるときの気持、とてもあなたにはわからないわ。わたしは……かもめ。いいえ、そうじゃない、おぼえてらして、

あなたはかもめを射落したわねえ、ふとやってきた男が、娘を見て、退屈まぎれに、破滅させてしまう……
：そう、ちよつとした短篇の素材……え、何を話してたんだけ？そう、舞台のことだったわ。今じゃもうわたし、そんなふうじゃないの、わたしはもう本物の女優……わたしは楽しく、喜び勇んで役を演じて、舞台へ出ると酔ったみたいになって、自分はすばらしいと感じるの。今、こうしてここにいるあいだ、わたしはしょっちゅう歩き廻って、歩き廻りながら考えるの。考えながら、わたしの精神力が日ましに伸びてゆくを感じるわ……わたしたちの仕事で大切なものは、名声とか光栄とか、わたしが空想してたものじゃなくて、じつは忍耐力だということがわかったの。得心がいったの。おのれの十字架を負うすべを知り、ただ信ぜよ……わたしは信じているから、そう辛いこともないし、自分の使命を思うと、人生もこわくないわ。（聞き耳をたてる）シツ、もうわたし行く、ごきげんよう、わたしが大女優になったら、見にいまして頂戴ね。約束してくださる？（架空の手をにぎる）もう夜がふけたわ。わたしはやっと立っているの、精も根も尽きはてて……なにか食べたいわ、（と、化粧台のクツキーをつまむ）いえ、駄目、送ってこないでね、ひとりで行けるから。トリゴリンに会っても、なにもいわないでね。……わたし、あの人が好き、前よりももっと愛しているくらい、コースチャ！昔はよかったわ、なんという晴れやかな、暖かい、よろこばしい清らかな生活だったんでしよう。優しい、すっきりした花のような感情……おぼえてらっしゃる？……人も、ライオンも、鷲も、雷鳥も、角を生した鹿も、鷲鳥がちょうも、蜘蛛も、水に棲む無言のさかなも、海に棲むヒトデも、人の眼に見えなかった微生物も……つまりは一切の生き物、生きとし生けるものは、悲しい循環めぐりをおえて、消え失せた……もう何千世紀というもの、地球は一つとして生き物に乗せず、あの哀れな月だけがむなしく灯りをともしている、今は牧場に寝ざめの鶴なの啼く音も絶えた……あ、いけない、もう出番！

女優C、不意にアエイウエオアオ、カケキクケコカコ……と発声練習して、楽屋をとび出して行く。
女優A・Bの表情がはじめて動く。

女優A あたしは……かもめ。

女優B いいえ、そうじゃない、あたしは、女優。そ、そうよ！

女優A あれで四十よ。

女優B 見て、あのバカ、帽子忘れてった。

女優A へえ。

女優B、立ち上って、帽子を持ってくると、自分の椅子の上にポンとおく。
その上に、尻をおろす。当然、帽子は無惨につぶれる。

女優C、あわてて戻ってくる。

女優C (探す) 帽子……帽子……帽子…… (見つけた) あら……

近づいて帽子をとろうとする。

女優B …… (尻に力を入れてふんばる)

女優C どういうこと!?

女優C、さらに力を入れて帽子をひっぱる。

そのとたん、女優B、腰を浮かす。

女優C、勢いあまってよろめく。

女優C もう我慢出来ない。明日から楽屋かえてもらうわ。

女優B どうぞご勝手に。

女優C (二人のいるあたりを睨みつけて) ふん、いつだってこの辺に、なにか腐ったようなよどんだ空気がたまってるんだから。

と、いい捨てて、女優C、そそくさと出ていく。

女優A 聞いた?

女優B 聞いた。

女優A あたしたちのこと、腐ったようなよどんだ空気だって。

女優B しかもたまってるだって。

女優A そうよ、たまってる。

女優B たまってるはないわよね、なんかみたくないじゃない。

女優A なんかって。

女優B つまり……固形じゃないでしょう。たまってるんだから。

女優A いずれにしろ、ムダってイメージねえ。

女優B ムダならいいけど、むしろ有害って感じよ、たまってるんだから。

女優A たまってるにあんまりこだわらないでよオ、だんだんプライドが傷ついていくじゃない……たまたま
ないわ。

短い間。

女優B それにしても、最近はずい分下品な帽子をかぶるのねえ。

女優A それを更に下品にしたの、あんたじゃない。

女優B もっとエレガントなやつをかぶったものだけ、あたしたちがやった頃は。

女優A あたしたちがやった頃？

女優B そうよ。

女優A へえ。

女優B なにがへえよ。

女優A まるで「かもめ」のニーナをやったような口ぶりじゃない。

女優B (傷ついて)前にもいっただろ、一度だけチャンスがあったんだよ。

女優A 一度だけ？

女優B そういふあなたはどなたなのさ。かもめどころか、ホシムクドリ役のチャンスだつてなかつたんだろ。あんたいつも口癖のようにいつてたじゃないか。ああ、あたしは永遠のプロンプターだつた……

女優A ふん、いまのお言葉、そっくりそのままお返しするよ。なんだい、バカにしゃがつて、あんたみたいに、あることないことべらべらおしゃべりはしないけど、あたしにだつてチャンスはあつたんだ、マクベス夫人の役。

女優B へえ、シェイクスピアのマクベス夫人……

女優A そうよ、あれは旅公演の途中だつた。たしか瀬戸内海のどこかの町……マクベス夫人がさ、朝ま、ま、かりを食いすぎちゃつて、突然の下痢なの、すごいなのたつて、昼頃にはもう危篤状態……

女優B なるほど、当然あなたにチャンスがまわつてきた。

女優A あたしは、お守りにしていた笠間神社のお札を出して祈つたわ、早く死ね！早くくたばれ！

女優B ところが夕方になると敵は奇蹟的にもちなおした。

女優A ところがそうじゃないの。

女優B そうじゃない!?

女優A ええ、夕方になると、今度はあたしが猛烈な下痢……

女優B あんたも、ま、ま、かり？

女優A (うなづく) さけられない運命だつたのよ。だつて、瀬戸内海へいけば、誰だつてま、ま、かりを食べるんだから。

女優B きつとあたしもダメねえ、あたしつてさけられない運命をさけられたためしがないのよ。

女優A そうよ、ま、ま、かりつて、とつてもおいしいんだから。

短い間。

女優B マクベス夫人か……あなたはいいよ、一度でもチャンスがあったんだから。あたしはなかった。

マクベスの公演には、四十回、いや五十回以上もプロンプターとしてついたけど。

女優A じゃ、セリフは全部おぼえている？

女優B おぼえてるわよ、なにしろ五十回以上やってんだから……（マクベス夫人のセリフ）……からす鳥の声ま

でしわがれる、ダンカンが私の城へ運命の到来するのを告げようとして。さあ、死をたくらむ思いにつき

まとう悪魔たち、この私を女でなくしておくれ、頭のとっぺんから爪先まで残忍な気持でみたくしておく

れ！ 血をこぼらせ、やさしい思いやりへの通り道をふさいでしてくれ、あわれみ深い人情が訪れて、私の

決意をゆさぶり、その決意が恐しい結果を生み出す邪魔をしないように。

女優A ちよっと待ってよ。

女優B なに、せっかく人がいい気持でやってるのに。

女優A ねえ、それ、戦後の翻訳？

女優B 戦後!?

女優A 違うんだよ、あたしの覚えているのと。

女優B どこが？

女優A どこって、あたまっから。

女優B あたまっから？

女優A (ポーズをとる。それもどこかなつかしい) 大鴉おおがらすの声もしわがれて、私のこの城へダンカン王の不祥りんこうの臨幸を啼き知らせる。

女優B 不祥の臨幸!?

女優A さあ、お前たち、弑逆しいぎやくの企みに伴ふ靈魔ども、来たりて私を女でなくしておくれ、頭から足の爪先まで、だう猛な残忍な心で一杯にしておくれ! この血を凝らして、気の毒と思ふ心への入口も、通りみちも、ふさいでしまつて、自然にそなはる憐みの情が思はず勃発して。

女優B 勃発!?

女優A この兇悪な目的を動揺させたり、目指す企みとその実行の邪魔をさせてはなりません! おお、人殺しに仕へる者どもよ、私のこの女の胸に来て、乳を胆汁に代へておくれ、お前たちは到るところに眼に見えない姿をして、人間の悪事を幫助してゐるのだから。

女優B 幫助!?

女優A …… (やめてしまふ)

女優B つづけてよ、ねえ。

女優A どうせあたしは古いんだよ、あんたよりずい分年齢としくってるし……なんたつて、あわれみの情が思はず勃発する時代だからねえ。

女優B (慰めるように) 勃発だつて、それとなく意味は通じるわよ。

女優A それとなく?

女優B まあ、こまやかさには若干欠けるけど。

女優A どうせあたしは、こまやかさに欠けるんだよ、だから、永遠のプロンプターだったんだ。

女優B　すぐこれなんだから。

女優A　扱いにくいと思ってるんだろ、戦前の人間は。

女優B　あんた、永遠のプロンプターなんていうけど、時々舞台に立ったんだろ、マクベス夫人とか、二ーナとまではいなくても。

女優A　そりゃもちろん……貴族Aとか伝令2とか門番3とか。

女優B　あら、男ばっかし。

女優A　そうなのよ、なぜか男ばかり……戦争に男優はとられて不足していたからねえ。そうだ、マクベスだって、少年の役で何度か出たわ。

女優B　少年の役？　どんなセリフがあった？

女優A　……（いおうとするがやめる）

女優B　どうしたのさ。

女優A　だって、訳が古いから。

女優B　いいじゃないの。

女優A　そういえば、博徒の役でも出たわ。

女優B　博徒ってやくざ？

女優A　そう。三好十郎作、「斬られの仙太」。もちろん、仙太じゃないわよ。

女優B　日本の戯曲じゃない、訳はカンケイないよ。（うながす）

女優A　だって……（突然、孫の手を刀に見たてて、後へまわす）まっぴらごめんねえ、一天四海、盆業渡世に無え作法だ、無えのを承知でお騒がせしましたこのおいら、逃げも隠れもするこっちやござんせんと

いいてえが、今夜のところあ、逃がしてもらいてえのだ。逃げてえのだ。へい、貸元衆！ お前さんちの前では口はばってえいい草だが、おいら人を斬るのはきれえだ。斬れもしねえ。

女優B ま、かっこいい、それがあんたのセリフ？

女優A いえね、こいつは仙太のセリフ……ねえ、聞いて下すっているかね、貸元衆、おりやあごらんの通り名も戒名もねえ渡り鳥、ホンの昨日今日かけ出しの三下でえす、へい。しかし筑波を荒したのが三下にしる渡世人のはしくれだったと、あとで世間にきこえてみなさんのお顔にかかる心配がありや、ぬすつとにして下すつても結構でがんす。おりやあぬすつとでえす、へい、ぬすつとだ。そのぬすつとも、これだけの金、うぬが栄耀栄華に使おうというんじゃねえ、何十という人の命が助かるのだ！

女優B ねえ、いつでてくるの、あんた。

女優A うるさいわねえ、もうちよつとよ……お願えだ、貸元衆、今夜のところは、お見逃しおたのん申してえ。仕事をすませりや、えり垢あ洗って出直してまいります。おたのん申します。同じ無職ぶじやくの人間が口をきいていると思やあ腹も立とうが、そうじゃねえ、百姓の子が火のつく様に泣いているのだ、みなさん衆の荒みあがり、それもホン一晚のところ、あつしに下すつたと思わねえで、その奴等に恵んでやったと思つて、今日の所あお見逃し下せえ、貸元衆、真壁村の仙太郎、恩に着ますでござんす、へい……待ちねえ、（周囲の殺気に目をくばる）おいら斬りたくねえ、殺生はしたくねえのだ。人を殺したくねえ、きこえねえのか！ とそこへ下妻の滝次郎、ぱつととび出してくる。

女優B ねえ。

女優A やかましいやい！ 仙太郎！ 口がたてに裂けやがったか！ 殺したくねえと？ なけりやこつちで殺してやらあ、それ、ぶつた斬ってしまえ！

女優B それがあんた？

女優A 違うわよ。

女優B じゃ、まだ？

女優A もう登場してるわよ。

女優B え？どこに？

女優A この辺にいるのよ。

女優B この辺？

女優A そう、この辺……下妻の滝次郎と一緒にとび出してきているのよ。ト書でいえば、滝次郎、ぱっととび出す。と同時に博徒七人抜きつれてザザツととび出してくる。みんな歯を喰いしばっていて無言である。

女優B 無言!?

女優A そう、みんな歯を喰いしばって……でもあたし、仙太や滝次郎にもプロンプつけなくちゃならないのよ、だから、ト書通りにはいかなかったわ。

女優B そりゃそうねえ。(歯を喰いしばって) こうやって、プロンプはつけにくいものねえ。

女優A (夢みるように) けど、あの芝居は好きだった……お蔭とかお妙とかすてきな女の役もあったけど、やっぱりぐつときたのは斬られの仙太……

女優B (瞞める) ……あんた、まさか。

女優A まさか、なによ。

女優B そのメイク。

女優A メークがどうかした？

女優B あたしには、ずっと謎だったのよオ。

女優A だから、なにが。

女優B あんたの永遠の役。

女優A それで？

女優B 斬られの仙太？

女優A よしてよ、あたしこれでも女優だよ、やっぱり女の役がいいよ……そういうあんたの永遠の役は？

女優B 秘密。

女優A ふん、あたしにはわかってんだ。

女優B いいえ、わかるもんか。

女優A ニーナよ、かもめ、凶星だろ。

女優B 凶星なもんか。

女優A いいえ、さっきの帽子の一件でピーンときたんだよ。まるで冬の底冷えみたいな意地悪さだった。

女優B 違ったら。

女優A ニーナ！ わがいとしのニーナ……わたしはトリゴリーンです。

女優B トリゴリーン!?

女優A ええ、あなたを心から愛し、いとおしく思っているトリゴリーンです。

女優B やめてよ、気持わりい。男役なら仙太の方がずっといいわよ。

女優A いいえ、やめません。ただし、多少の翻訳の古いところは許して下さい。ところでニーナ。じつは

思いがけない事情のために、どうやら今日たつことになりそうです。あなたとまたいつお会いできるかどうか。残念です。わたしは長い間、ごくたまにしか若いお嬢さん、しかも若くて、美しいお嬢さんに会う機会がなかったもので、なにを話していいものやら……だいいち、十八九の年頃には一体どんな気持ちでいるものか、とんと忘れてしまって、どうもはつきり頭に浮んでこんなのです。

女優B そのセリフ、リアリティあるわ、あんたには。

女優A まじめにやって下さい！ あなただって永遠のプロンプターだったんでしょ、ニーナ。

女優B ああ、すてきな湖……すてきな木立……すてきな大空。

女優A その調子……でもそんなセリフあった？

女優B いいから、好きなどこだけやるんだから……すてきな湖、すてきな木立、すてきな大空……あたし、このほとりに立つと、いつも自然の大きさ、豊かさというものをしみじみと感じるんです。でも、あたし、女優になれるんなら、女優になるためなら、この自然でもどんなものでも敢然と犠牲にするわ。

女優A どんなものでも？

女優B ええ……女優なんて、そんなしあわせな身分になれるものなら、わたしは周囲の人間に憎まれても、貧乏しても、幻滅しても、りっぱに耐えてみせますわ。屋根裏住いをして黒パンばかりかじってもかまいやしない。その代り、わたしは要求します、名声を。

女優A 名声を。

女優B ええ、ホントの、割れ返るような名声を。

女優A ホントの、割れ返るような名声を。

女優B ああ、頭がくらくらする……

女優A しっかりして、ニーナ……あ、誰かがわたしを呼んでいる。きっと荷造りでしよう。立ちたくないなア。

女優B (不意にピヨコンと顔をあげる) ねえ、湖の向うに、家と庭が見えるでしょう。

女優A どこに? ええ、見えますとも。

女優B ホントに見える?

女優A (潰れかかった眼を見張って) 見えるはずですよ!

女優B あれが亡くなった母の屋敷です。わたしはあそこで生れたの。それからずっとこの湖のそばで暮しているものだから、どんな小さな島でもみんな知ってますわ。

女優A ここはまったくくすばらしい……(足元にかつらが一つ、バサツと落ちる) なんです、これは。

女優B かもめよ、トレープレフさんが射ったの。

女優A きれいな鳥だ。(なにか書くマネ)

女優B なにを書いてらっしゃるの?

女優A いや、ちよつと題材が浮んだもので、ほんの短篇の素材ですがね……湖のほとりに、ちようどあなたみたいな若い娘が子どもの頃から住んでいる。かもめのように湖が好きで、かもめのように幸福で自由だ。ところがふとやって来た男が、その娘を見て、退屈まぎれに娘を破滅させてしまう……

女優B まあ。

女優A どうです、いい話でしょう。実際どこにでもころがっている話だ。それにあなたのような若い女優さんには、ありがちな話……(と、意地悪い視線を女優Bのど元に向ける) おや、わがいとしのニーナ、どうしたんです、そのホータイ、まあ、血が滲んで……あなたもかもめのように誰かに射たれたん

ですか。

女優B やめて。

女優A (構わず強引に女優Bののど元を開いて) あらあら、首のまわりにためらい傷がいっぱい……とい
うと、あなた自分の手でこれを……おそろしいこと……わからないわ、なんのためにこんなバカげたこと
を……芝居のため？ 男のため？ それともその二つを必要にして充分含んだ理由のため？

女優B (女優Aを突き放す)

女優A (冷笑を浮かべ) でもニーナ、一言だけいっとくわ、男のために自殺する女優なんて最低。女優のた
めに、何人の男が死のうと、それはその女優のかがやかしい勲章だけ……逆はだめ。逆は女優としては
一番最低の行為、そうでしょう。

女優B ふん、黙ってきいてりゃ勝手なごたく並べちゃって、どうせあたしは女優失格なんだよオ！ そり
ゃあんたはいいいさ。あんたのその傷は、時代つてもものがけばけばしく飾りたててくれるもんねえ……戦争
か。兵器工場、女子挺身隊、空襲……なにせ世間さまは、戦争の傷あとには、結構甘い感傷をもってらっ
しゃるからねえ。

女優A ちょっと、なにをいいたいんだい。

女優B ま、すごんじやって。

女優A いいたいことがあるなら、はっきりいいなさいよ。

女優B 別に……ただあたしは、爆弾にやられた傷と庖丁の傷と、どっちがとくか、よく考えてみようと思
っただけさ。

女優A ふん、そういうもってまわったいい方が、戦後のリアリズムかい。

女優B　へえ、そういう陰気な迫り方が戦前のリアリズム？

女優A　うるさいわねえ、どぶねずみ！

女優B　なにさ、とげねずみ！

たがいに、化粧台の上のものを投げ合う。次の瞬間、

相手を見殺して、それぞれのメイクにはげむ。

長い間。

それぞれのメイクがうまくいかなくて、前後して、カンシヤクをおこす。

長い間。

女優A　ねえ。

女優B　……………

女優A　あたしって、つまらないことにこだわる性質たちんだけど……………とげねずみってなあーに。

女優B　とげねずみはとげねずみよ。

女優A　そんなの、いるの？

女優B　いるの？ あんたって、いつだってそういうトゲのあるきき方をしてあたしを傷つけるんだから…

…いますよ、実在するわよ、奄美大島に。

女優A　どんな所にいるの？

女優B　イモ畑。

女優A イモ畑!? そう。住んでいる環境としたら、どぶねずみとあんまり大差ないわねえ、むしろ生活レベルは上くらい。

女優B ……(口惜しそうに見る)

その時、女優D(比較的若い)がひっそり入ってくる。なぜか胸に、大きな”まくら“をしっかりと抱きかかえている。

足をとめ、ぐるりと楽屋を見渡すと、片隅の椅子にチヨンとかける。

そのまま、微動だにしくなる。

(もうおわかりと思うが、女優A・Bは死人なので、女優Dには姿は見えない)

女優A・B、無遠慮にじろじろ観察する。

女優A 誰?

女優B さあ、見たことのあるような顔だけど。

女優A あたしたちの知り合い?

女優B まさか。

女優A なあーに、あれ、まくらみたいなもの。

女優B、立ち上る。

女優A よしなさいよ。

女優B、構わず、女優Dに近づき、のぞく。

女優A なんだった？

女優B みたいなものじゃなくて、まくらそのもの。

女優A へえ。

この間、女優D、床の一点を睨めて微動すらしない。女優B、女優Dの真正面にしゃがみこむ。

女優B あ、思いつめてる。

女優A 思いつめてる？

女優B でなきや、熱でもあるのよ。まじないかしら、まくら。

女優A なんの？

女優B こう、抱いてると熱が下る……

女優A 聞いたことがないよ、そんなの。

女優B (さらにしつこくのぞき込む)

女優A ねえ、よしなさいったら。

女優B、戻りかける。

女優D ママ。

女優B、ギョツとして立ち止まる。

女優D (視線を床に落したまま) ママ、あたしの手紙読んでくれた？

女優B 手紙!?

女優A・B、顔を見合う。

女優D ……手紙にも書いてあったでしょう、あたし、やっと健康になれたのよ。あたしたちの仕事って、才能も大事だけど、なんたって健康でしょう。健康にはなんたって睡眠が一番……その点、あたし、充分すぎる程の睡眠をとったわ。ムーア人のことわざにもあるでしょう、よいまくらはよい眠りを確実にする……あたし、ちゃんとその通りに実行したのよ、睡眠にはなんたってよいまくら……ママ、あたしもう大丈夫……本当よ……あたしは健康そのもの。だからママ、安心して……

女優A・B、ポカンと見ていたが、あわててメイクに戻る。

女優B　ねえ。

女優A　うん？

女優B　あなたがママだったら、安心する？

女優A　しないねえ、多分。

その時、奥の方（つまり舞台とおぼしき方向）から、音楽が流れ込んでくる。

「かもめ」のエンディング。

それを聞くと、女優D、はっと顔をあげる。

そして、舞台にいるかのように、中央に出てくる。

楽屋そのものも、なぜか調子を合せて、スポットがしぼられていく。

女優D　……わたしは行くわ、ごきげんよう。わたしが大女優になったら見にいらして頂戴ね。約束してくださる？　もう夜がふけたわ。わたし、やっと立っているの、精も根も尽きはてて……何か食べたいわ。いえ、駄目、送ってこないでね、ひとりで行けるから。トリゴリンに会っても、なんにもいわないでね。……わたし、あの人が好き、前よりももっと愛しているくらい、コースチャ！　昔はよかったわ、なんという晴れやかな、暖かい、よろこばしい清らかな生活だったんでしょ。優しい、すっきりした花のような感情……おぼえてらっしゃる？　……人も、ライオンも、鷺も、雷鳥も、角を生した鹿も、鷺鳥も、蜘蛛も、水に棲む無言のさかなも、海に棲むヒトデも、人の眼に見えなかった微生物も……つまり一切の生き物、生きとし生けるものは、悲しい循環めぐりをおえて、消え失せた……もう何千世紀というもの、

地球は一つとして生き物を乗せず、あの哀れな月だけがむなしく灯りをともしている、今は牧場に寝ざめの鶴の啼く音も絶えた。菩提樹の林に、こがね虫の音おとずれもない……

スポットがしばらく暗転。

ややあって、遠くから盛大な拍手の音。

それが遠のくと、明りが以前の楽屋のそれに戻る。

女優C、舞台よりもどってくる。

女優C あ、かゆい、かゆい……

入ってくるなり、かつらをとって、かみの毛をくしゃくしゃにかく。

女優C なに、あのうすバカ！ ぜんぜんプロンプがきこえやしないじゃないの……おぼえてらっしゃる？
人もライオンもわしも雷鳥も角を生した鹿も鷺鳥も蜘蛛も水に棲む無言のさかなも海に棲むヒトデも……
海に棲むヒトデも……どうして、ここばかりトチるんだろう。海に棲むクジラでなくてヒトデ……ま、
今日くらいのはいいんじゃない、クジラにしるヒトデにしる、とにかく海に棲んでるんだから……

ふと、片隅の椅子に、まくらを抱いて凝じっとしている女優Dに気づく。

女優C キー子……

女優D ……（頭を下げる）

女優C 黙っているからわからないじゃないの……いつきたの？ もういいの体の方？

女優D ええ、おかげさまで。

女優C そう……（ふとまくらを見とがめて）どうしたの、それ。

女優D はあ、つまらないものですけど、プレゼントしようと思って。

女優C プレゼント？

女優D ええ。

女優C、差し出されたシミだらけのまくらに驚く。

女優C 気持はうれしいけど、ま、まにあってるの、まくら。

女優D そんなことおっしゃらずに……

女優C いえ、ホントに（まくらを押しかえすようにして）でも、よかったわ、あなたがもどってきてくれて……あなたが病気で倒れたあと、かわりにほら、去年入ってきたあの子にプロンププやってもらっているんだけど、とっても間が悪くって……ねえ、明日から、あなた、またやってくれない？

女優D えっ。

女優C プロンププよ、あたしの。

女優D ……

女優C どうしたの、だめ？

女優D あの、あたし、……健康になったんです、すっかり。

女優C ええ、だから。

女優D 長いこと、すっかりご迷惑かけちゃって。

女優C いいのよ、そんなこと気にしなくて、……それより、やってくれるんでしよう、プロンプ。

女優D プロンプ？

女優C (いらいらして) プロンプよ。

女優D (いらいらして) どうしてあたしのいってる意味が通じないのかしら。

女優C 意味って。

女優D あたし、もうすっかり健康になったんです、だから。

女優C だから、なによ！

女優D 返していただきたいんです。

女優C (ポカンとする) 返すって、なにを。

女優D まあ…… (白っぱくれてという笑い)

女優C (不安になる) なにか、あずかった？

女優D あずかっただなんて。

女優C はっきりおっしゃい、いったいなにを返せっていうの。

女優D ニーナの役。

女優C え？

女優D　ですから、ニーナの役を返して欲しいっていつてるんです。

女優A・B、仰天して、ドーランのパレットを落す。

女優Cも、一時、口がきけない。

女優C　ねえ、キー子……あなた、自分がなにをいつてるかわかっているの？

女優D　ええ、もちろん……そっちこそどうしてあたしが健康になったことを認めてくださらないんですか、こんなに顔色がよくなったでしょう。

女優C　あのねえ、たとえ健康になったからとってたってねえ。

女優D　長い間ご迷惑をかけたことはお詫びしているでしょう。

女優C　……（言葉を捜す）

女優D　……（凝っと瞞める）

女優C　病院へ帰りなさい。あなたまだなおってないのよ、話にならないわ。

女優D　どうして話にならないんでしょうか。

女優C　キー子……ニーナの役はねえ、はじめっからあたしなの、そして、あんたははじめっからあたしづきのプロンプターだったの。こんなこといっちゃなんだけど、あんたにまだニーナの役がつくわけない

でしょう。

女優D　………

女優C　どう、わかった？

女優D ……………

女優C あたし、これから人と食事するの、帰って。

女優C、さっさと着換えをはじめ。女優D、まくらを抱いて動こうとしない。

女優A・B、すっかり女優C・Dの方に気をとられていて、メイクが珍妙な形相になっている。

女優A・B、たがいの顔のすさまじさに気づいて、あわててなおしはじめる。

女優C、ニーナの衣裳をハンガーにかける。

女優C …… (女優Dの視線が気になる)

女優D ……あたしがいけなかったんです。こんなチャンスに病気なんかしちゃって……あたし、病院のベッドで何通も何通も手紙を書きました。お詫びの手紙……だって、作者に申し訳けなくて。

女優C 作者に申し訳けない？

女優D ええ、あたしのためにこんないい役を書いてくださったんですから。

女優C あなた、作者が誰だかわかってるんでしょうねえ。

女優D そんな……もちろんですわ。

女優C 七十年前に死んじゃっているの。

女優D それ、たんなる噂でしょう。

女優C (愕然) 噂!?

女優D おとついだったかしら、電話でお話したんです。

女優C 誰と？

女優D ……………

女優C (女優Dを見すえて) わかってきたわ、だんだんと……はつきりいっていいのよ、キー子。

女優D ええ……

女優C なんならあたしが当ててみようか、もしかして作者じゃない？

女優D そうなんです。

女優C よかったわねえ、作者とお話が出来て。あたしなんかチエーホフの作品を何回もやっているけど、

まだ一度もお話出来ないのよ。これからも多分永久に出来ないと思うけど……で、なにを話したの、作者と。

女優D いろいろと。

女優C そう、いろいろ。

女優D それで、電話を切る前にこうおっしゃったんです。一日も早く体をなおして舞台へもどれて、きみの元気な舞台姿を見るのを楽しみにしてるって……

女優C へえ。

女優D ですからあたし、明日からでも、ニーナの役……

女優C そうはいかないわ。

女優D でも、健康になったんです。

女優C だめ。

女優D (黙って、まくらを差し出す)

女優C どういう意味？

女優D (無言で押しつける)

女優C いらなさいったでしょう。

女優D これ、あたしが愛用してたもんなんです。とってもよく眠れるんです。どうぞあたしのかわりに……

女優C かわりにどうしろっていの？

女優D ……………

女優C あなた……まくらとニーナの役を交換しろっていの！

女優D ……………

女優C どこからそんなキテレツな発想が出てくんのよオ！

女優D だって、おつかれでしょう。

女優C つかれてなんかいないわよ。

女優D いいえ、つかれてらっしゃるわ、とっても。疲労にはなんとって、休養と睡眠……

女優C やめてよ！こんなもの！

まくらを投げ捨てる。

まくら、女優A・Bの方へとんでくる。

女優C あたし、女優を長いことやってるけどはじめてよ、役をおりろって、まくらで迫ってくるの……

これ以上、相手する気になれないわ、帰って。

女優C、鏡に向って、ドーランを落としはじめる。

女優A・B、とんできたまくらに関心を寄せる。

女優B (臭いをかいで) 汗くさい。

女優A でもなんか、とつても執念がこもっているって感じ。

女優D、まくらに近づく。

女優A・B、あわてて手をひく。

女優D、まくらを拾って、いとおしそうに抱く。

女優D (つぶやく) せっかく病室を予約しておいたのに。

女優C え?なんていったの?

女優D せっかく病室を予約しておいたのになって、いったんです。

女優C 病室?

女優D ええ。

女優C 誰のために? (はっと気づく) あたしのため?

女優D (うなづく)

女優C ……（口もきけない）

女優D そりゃ個室をとりたかったんですけど、あいにく満室で……でも、考えようによっては、大部屋の方がいいんじゃないかと思って……テレビはあるし、いろんな話し相手には困らないし……おとしよりなんか個室より大部屋を希望される方が多いんですよ……いつかおっしゃってたでしょう、マンションへ帰っても話し相手もないし、ひどくさびしいって……あたし、つくづく思ったんです、人間には孤独が一番いけないんじゃないかって。

女優C ……（ドーランを半分落した顔で啞然と聞いている）

女優D よく考えてみると、女優って、報われるものの少ない職業ですものねえ、なにかも犠牲にしちゃって……しかも日に日にみずみずしさを失っていく肉体にムチ打って、ひたすら求めるのは絵空ごとの愛ばかり……だからあたし思うんです、こんなつらい仕事は長くやるべきじゃない、こんな残酷な仕事に耐えられるのは若い時だけだって……

女優C あなた、それであたしを救おうと考えたわけ？

女優D 救うなんて、そんな大それた……ただこういう気持、あたしだけじゃなくて、あたしの年頃の人、みんな持っているんです、ただ口に出さないだけで。なんていったらいいのかしら、早くあんな残酷な仕事から解放してあげなくちゃいけないって……ニーナなんて役、とくに大変でしょう、蝶のように動きまわって。それなのに、あたしの病氣からムリヤリ押しつけるようなかたちになって、本当に申し訳けなくって……

女優C キー子。

女優D え？

女優C (抑えて) あなたにわかるようにいうには、どういえばいいのかしら。そりゃねえ、女優って仕事は残酷よ、たしかにいろんなものを犠牲にするし……なにより残酷なのは、いつまでも若くはないってことよ、年々、肉体は自分を裏切っていくし……

女優D でしょう。

女優C 待ってよ、あたしのいいたいことはそうじゃないのよ、つまり、そう、つまり肉体だけがすべてじゃないってこと、ニーナの役だって、ただ若けりやいいってもんじゃないの……なんていうのかな、蓄積が必要な、いろんな蓄積……ある意味であたなのいう孤独だって蓄積のひとつよ。

女優D まあ、孤独が蓄積ですか。

女優C 孤独が蓄積じゃないの、そんなこといってないでしょう、孤独が要するに、こう……ああ、混乱してきたわ、とにかくねえ、あたしは残酷な仕事であることは、百も承知で、女優をやってるの、女優という職業を選んだの。選んだからには、そこに残酷な部分が山とあったって、かまいやしない、だったらその残酷さをとことん味わってやるだけよ、あなたがなにをいおうとニーナの役は手放さないわ、これからさき、百回でも二百回でもやりつづけてやる！ ばばあになっただってかまうもんか、あたしは残酷さに飢えてんだから、ああ、バカなことを、さっきからいってることが支離滅裂だわ、残酷さに飢えてるなんて。

女優D やっぱりつかれてらっしゃるんだわ。

女優C え？

女優D 予約してあるんです、病室。

女優C 出ていって！

女優D …… (凝っと瞠める)

女優C これ以上、あたしを怒らせないで。こわいの、あなたみたいな人と話すの、……ねえ、わかってよ。どなったりしてみじめになりたくないのよ。

女優D ……

女優C (哀願するように) おねがい、帰って、……本当につかれてきたわ、ひとりにして。

女優D …… (まくらを差し出す)

女優C やめてったら!

女優C、逆上して、傍のからのビールびんをとりあげるやいなや、女優Dの頭部にふりおろす。ビールびん、砕け散り、女優D、ぶっ倒れる。

女優C (我に返る) キー子……

女優C、女優Dにかけより、かかえ起す。

女優A・B、露骨な好奇心をあらわにしてのぞき込む。と、女優D、女優Cの手を払いのけるようにして、立ち上る。

女優C 殴る気はなかったのよ、大丈夫?

そのとたん、女優D、ぐらっと倒れかかる。女優C、あわてて支える。

女優C　しっかりして。

女優D　あたし……健康ですから。

女優C　それはわかってるけど。

女優D　まくら。

女優C　……（足元のまくらを拾って渡す）

女優D、ふらふら出入口の方へいく。

女優C　どこへいくの？

女優D　なんたって、つかれには眠りが一番です。

女優C　キー子。

女優D、まくらを抱いて、出ていく。

女優C、椅子にかける。

女優A・B、意地悪い目で観察する。

ややあって——突然女優C、化粧台の上のティッシュペーパーの箱をカ一杯たたきつける。それが、女優A・Bの方へとんでくる。

女優A・B、危うくさける。

と、女優C、化粧台の上のいろんな物を次から次へと、壁や床へたたきつける。

女優A・B、あわてて逃げまどう。

女優C ふざけんじやないよ、まったく！ あんなチンピラ女優にバカにされてたまるか！ ハハ……まくらと交換に役をくれ？ 背中の骨がガタガタいって笑っちゃうよ！ けっ、よくいうよ、あたしたちみんな思ってるんです、早くあんな残酷な仕事から解放してあげなくちゃいけないって……世の中いくら解放ばやりだといったってね、あたしまで解放されちゃたまんないよ！ 冗談いうなってんだ！

また、物がとぶ。

女優Bに命中。

女優B あっ。

女優A 大丈夫？

女優B なんだって、こっちばかりとんでくるんだろ。

女優A まるで狙ってるみたい。

女優C、ブランデーをグラスについてあおる。

女優C　ふん、あれがニーナをやるタマかよ！魚眼レンズみたいな眼しちゃって……やたらとギラギラギラギラ、あれが若さとか情熱とかいうんだったら、世の中、お化けの行列だよ！体ばかりどでつとでかくて、いくら発育がいいからって、ウドの大木みたいな体じゃ女優はつとまんないんだよ、おまけになあーに、あの、のろくさつとした動作、上野動物園のカバだって、いぎ水へ入ろって時あ、もうちよつとスパツと動くわよ、それがニーナだって、かもめだって、ハハ……（コップをあおる）あ、もうこんな時間、バカバカしいことですっかり時間つぶしちゃって。

女優C、鏡の前にすわり、外出用の簡単な化粧をはじめめる。
ふと、手をとめて、鏡を凝つと覗める。

女優C　……キー子、あんた、相手が悪かったんだよ、まくらぐらいで迫ったってダメ、あたしゃ心臓にヒゲが生えてんだから。そりゃねえ、女優二十年、だてに年齢はくっちゃいなんだよ……あんたなんて、体験したことはないだろ、このかみの毛の、毛穴という毛穴からじわつと血が吹き出すような思い……あたしゃ何十回となく味わってたんだよ……わかるはずはないさ、毛穴全部から血が吹き出す感じ……相手を刺すか、自分が死ぬか……あんた、人間が吼えるっての聞いたことある？わめくとかののしるか、そんなんじゃないんだよ、吼えるんだよ……アパートのトイレにこもって……ひとり……一晩じゆう五時間も六時間も……あれは人間じゃないよ、猛獣の吼え声だよ……のどがかれるたびに手洗いの水を得る……吼えて吼えまくって……おかげで、前よりだんだん声が出るようになってさ……つまり蓄積……へどが出るような……（長い沈黙）

女優C、タバコに火をつける。

化粧台のプレイヤーに手をのばす。

音楽が流れる。

女優C、立ち上って、着替えのためにガウンを脱ぐ。

スリッパ姿。

ふと、鏡の中の自分の姿を、いろんなポーズをとって覗める。

女優C ……そりやいろんなものを犠牲にしたさ、でもすべては納得ずく……これからもあたしは納得ずく……戦いは果てしなく、鏡のなかのわが戦士……（グラスをかかげる）……たそがれの中にひとり……ゆらめく檜の焰のかたわらに坐り、遙かなる昔のさまざまな戦争の場面を思う。数知れず名も知れぬ埋葬された兵士たち……戦闘のあとの短い夢のような休戦のひととき……そのひまにいかめしい面持で活動する埋葬部隊……塹壕いっぱい積み上げられた死者たちの蒼白い顔……熟れたすばらしい野心の真昼……そしてやがて、このわたしの部屋の闇……音もなく明滅する焰の薄明りの最中、わたしにはふたたび見える、がっしりした兵士たちの隊列を組みつつ立ち現われるさまが、ふたたび聞えてくる軍隊のリズミカルな足音が……
(笑う)

と、また女優D、まくらを抱いて、姿を見せる。

そして、入口の隅にひっそり立つ。

女優Dの顔、やや蒼ざめている。

女優A 見て。

女優B あ、また、あのまくら女。

女優C、プレイヤーをとめる。

女優C さてと……

女優C、女優Dの目を横切って、普段着をとりに行く。

女優D ……（なにか話しかけたそう）

しかし、女優C、気づかない。

女優Dのすぐそばで、着換えながら、ニーナのセリフをつぶやく。

女優C ……あなた、さぞわたしを憎んでらっしゃるでしょうね、それが怖かったの、トレープレフ。毎晩おなじ夢を見るのよ、それはあなたがわたしを見ているくせに、わたしと気づかないの、この気持、知ってくださいたらねえ。（この間、女優D、しきりに話しかけようとするが迷う）ここへ着いたその日か

ら、わたしは、湖のへんを歩いてきたの。お宅の近くにもたびたびきたけど、入る勇氣はなかったわ。さ、坐りましよう、（鏡に向けて椅子にかけ、顔や衣服をなおす）坐って、どうぞ、ここはいいわ、ぽかぽかして、居心地がよくって……あの音は？ 風ね……ツルゲーネフにこんなところがあつたわ、”こういう晩にうちの屋根の下にいる人は仕合せだ、暖い片隅を持つ人は“……わたしはかもめ、いいえ、そうじゃない（額をこする、立つ）なにをいってんだっけ、そう、ツルゲーネフね……（バッグを持ち、入口あたりで楽屋をふりかえる）主よ、ねがわくば、すべてのよるべなき漂泊^{さすらい}びとを助けたまえ……

女優C、出ていく。

女優D ……………

追おうとするが、茫然と見送る。

長い間。

女優D、ゆっくり顔をあげると、楽屋の中に視線をめぐらす。

そんな女優Dの様子を、女優A・B、メイクの手をやすめて眺める。

女優Dの視線、やがて女優A・Bのところへきてとまる。

一瞬、瞞め合い……次の瞬間、女優A・Bあわてて視線をそらし、メイクの作業にもどる。

女優D、女優A・Bの方へ、ゆっくり近づいてくる。

女優D ……(瞞める)……今晚は。

女優A・B、仰天して、椅子からころげ落ちる。

女優D 今晚は。

女優B 見、見えるの、あたしたちが。

女優D ええ。

女優A わ、わかるの、あたしたちが。

女優D ええ。

女優A じゃ、あなたも……

女優B (女優Aに) さっきの、あれよ、よっぽど打ちどころが悪かったのよ、可愛いそうに。

女優D あの。

女優A はあ。

女優D 質問してもよろしいでしょうか。

女優B どうぞ。

女優A よろしく。

女優D (二人の作業を観察して) こちらは毎晩そうやって。

女優B ええ、まあ……すみません、お邪魔しちゃって。

女優D いいえ、そんな。

間。

女優D あたし、感じていました。

女優A なにを？

女優D ちっとも不思議じゃないんです、お二人にお目にかかっても……もちろんはっきりしたものじゃありませんけど、なにか感じていました、あなたたちの存在を。

女優A この辺によんだ空気のようなもの？

女優B たまっているというか。

女優D いいえ、そんなんじゃないやありませんけど、いつも声なき声のようなものが聞えていました、毎晩楽屋へ入ると。

女優A 声なき声？

女優D ええ、低くささやくような。

女優B だめねえ、いくら頑張っちゃったって、プロンプターのくせが身にしみついちゃってるのねえ。

間。

女優D あの……質問してもよろしいでしょうか。

女優B どうぞ。

女優A でも、あんまりむずかしい質問は。

女優D 長いんですか、こうやってらっしゃるのが。

女優B こうやってらっしゃる？

女優D つまり、楽屋通いというか。

女優B あたしは最近……こちらは古いのよ、とっても。見て、この傷、空襲の時の。

女優D まあ、空襲ですか、太平洋戦争当時の。

女優A (気を悪くして) あんまりジロジロ見ないで、博物館になったような気分。

女優D でもそれからずっと？

女優A なにも思いつめて通ってるわけじゃないのよ、ほかにいく所もないからなんとなく。

女優D おつかれでしょう。

女優A え？

女優D そういえば、こちらよりもずっとつかれてらっしゃるみたい。

女優B やっぱり。

女優A なにがやっぱりよ。

女優D つかれにはなんたって睡眠が一番……これ、使い古してなんですけど……(とまくらを差し出す)

女優A (あわててとびのく) いいのよオ、苦手なの、それ。

女優D まくらが苦手？

女優A ええ、そうなの、なぜか……

間。

女優D あのこと……もう、そろそろですか。

女優B そろそろ？

女優D ええ、出番……

女優A・B、顔を見合せて、黙ってしまおう。

女優D 出しものは、なんですか？

女優A・B、無言。

女優D 出しもの……

女優A・B、無言。

女優D あのこと……

女優B うるさいわねえ！ガタガタガタ、少しは黙っていたらどうなの、け、まつげがとんじやったじゃないか！

女優D ごめんなさい。

間。

女優D ……やっぱり、チエーホフ、ですか？

女優B チエーホフ？

女優A そういえばあんた、つい最近チエーホフと電話で話したんだわねえ。

女優D まあ、聞いてらしたんですか。

女優B ねえ、チエーホフだとしたら、なんだと思う？

女優D ……三人姉妹かしら。

女優A 二人だけでどうやって三人姉妹やんのよ。

女優D 二人しかいないんですか。

女優B ごらんの通り、少なくともこの楽屋にはねえ。

長い間。

女優D ……わかってきたわ。

女優A へえ、なにが。

女優D 決ってないんでしよう、なにも。

女優A・B、無言。

女優D ただそうやって、毎晩、自分勝手なメイクをして出番を待っているだけ、永遠にやってこない出番を待っているだけ……でしよう。

女優A・B、無言。

女優D バカバカしいと思いませんか？ あたしはこんなみじめなマネはいや、こんなだったら、まだ病院のベッドにいる方がましです。

女優A ふん、だったら病院へもどったらどうなんだい！その大事な大事なまくらチャンと一緒に……ただし、あなたのベッドはもうないよ、あなたにはもう安らかな眠りなんてないのさ。

女優D ……（ショック）ほんとに、あたしのベッドはないんでしょうか。

女優A 信用出来ないんなら、さっさといったしかめておいでよ。

間。

女優B ……そのうちに、あなたも慣れるよ、こうやって待つのが。

女優A そうよ、じきにあたしたちみたいになるんだから。

女優B あたしたちだって、ただバカみたいに待ってるわけじゃないんだよ、それなりに努力してんだから……いろいろなと、過去の蓄積をほじくりかえしながら。

女優A さっきなんか、ほじくりかえしすぎて、のどがかれちゃったくらいよ。

女優D どんなものをほじくりかえしたんですか。

女優B どんなものっていろいろと……なにしろ蓄積が多いんだから。

間。

女優D ……これからあたしにも……長い夜がくるんですね。

女優A・B、顔を見合せる。

女優A じきになれるわよ、時間のいろんな使い方は、あたしたちのやってることを見てれば、参考になるし……

女優B 第三者からみれば、だらだらやってるように見えるかも知れないけど、これはこれで、一応段どりがあるんだから……ねえ。

女優D、不意に立つ。

女優D でもあたし、やっぱり思うんです、なにかをやるべきだって。

女優B なにかはやってんのよオ!

女優D あたしのいつてる意味はそうじゃないんです、なにか決めてちゃんと……なんていうか、もっとこ
う、来たるべき日に備えるっていうか。

女優B 来たるべき日?

女優D ええ、なにかの拍子で、出番がやってこないとも限らないし。

女優A ふん、この人(女優B)も、はじめはそんな夢をもっていたわねえ、けど、来やしないんだよ、そ
んなもの。

女優D ……あなた、やっぱりつかれてらっしゃるんです。

女優A よしてよ!

女優D いいえ、きつとつかれてるんだわ。(まくらで迫る)

女優A 畜生! そういって、あたしの役をとりあげようってんだろ、その手にのるもんか! なんて子なん
だろう、見境もなく人の役を狙うんだから。まくらで迫ったって渡すもんか! 出てけ!

女優B ちよつと。

女優A なによ!

女優B あたしの役って、役なんか決ってないじゃないのよ。

女優A (ムツと押し黙る)

長い間。

女優D あたしって、誤解されやすいんです。でも誤解されやすいところが、もしかしたら女優に向くんじゃないかって、或る人がいつてくれたんです……間違いでした……あたしって協調性と普遍性にかけるんです、誤解されやすいってことは、あたしにとって誰からも愛されないことなんです……あたしはいつだってひとり……今までだってそうだったしこれからだって……

女優B 待ちなさいよ、あなた、突然総括なんかしちゃってどうしたのよ。そりゃ誤解されやすいってこともつらいけど、その反対だってつらいのよ……あたしなんか人がいい、人がいいっていわれて、あ、あたしはホントに人柄がいいんだなんて思い込んでた時期もあったけど、ある時ふっと思っただの、あたしや空気みたいなもんじゃないかって、そりゃ空気も悪くないけど、オレ、愛してるよ、真剣に……とか、オレ、きみの才能をなによりも高く買ってるよ、なんて誰もいつてくれないもんねえ、空気に対して……だからさ。

女優D (かたくなに) もういいんです、決めちゃったんです。

女優B なにをさ。

女優D 今後ごめいわくをかけません、ひとりで、あたしなりにやっていきます、いつかやってくるかも知れない出番を待って……きつと前から運命づけられていたんです、長い夜をたったひとりですごすことが……(突然「三人姉妹」のイリーナのセリフ)……ああ、不都合なあたし、……あたし働けないの、もう働くのはごめんだわ、沢山よ、もう沢山……これまで電信係もしたし、今は市役所に勤めてるけど、まわってくる仕事片っぱしから憎らしいの、バカバカしいったらありゃしない。

女優B 電信係とか市役所って？

女優A 三人姉妹のイリーナのセリフ。

女優B あ、もうやってんの。

女優D ……ああ、あたしはもう二十四、働きに出てからもう大分になるわ、おかげで脳みそがカラカラになって、やせるし、老けてしまうし、それでいて何ひとつ心の満足というものがないの……ああ、時がどんどんたっていく、そしてますます本当の美しい生活から離れていく、だんだん離れていって、何か深い淵へでも沈んでいくような気がする……

女優A ちょっと。

女優D え？

女優A 困るのよ、傍でガアガアやられると、それに勝手にイリーナの役なんかとっちゃって。

女優D とっちゃって!?

女優A 誤解されやすいのはあんたばかりの特権じゃないわよ。あたしだってその点に関しては引けをとらないよ。だから女優を！誤解されて誤解されて誤解された上でポンと裂けて何かかわる。何かが生まれる。何度そう思って何度気を取り直したことか。生きてる人間の心臓は胸にあるかもしれないけれど、私たちの体はどこもかしこも心臓だらけ。手の先にも足の先にも心臓がある。そして、いたる所で汽笛を鳴らす。

女優B いたる所で汽笛を鳴らす。

女優A そう、いたる所で汽笛を鳴らす。

間。

女優B ……これからも夜は長いのねえ。

女優A そう……あたしたちには太陽の光りがふりそそぐ熟れたような真昼はないのよ。

女優B だったら、ちよつとばかり生活を変えてみるのも悪くないわねえ。

女優A まあねえ、三人にもなったことだし……

女優A・B、どちらともなく顔を見合せて、微笑する。

女優A あんた、マーシャをやる？

女優B あんたはオリガ？

女優A あたし、久しぶりの女の役よ。

女優D あの……

女優B そんなまくらなんて捨てなさい、あんたはイリーナ、のぞみ通りでしょ。

女優A 待って、あわてることはないわよ、時間はたっぷりあるんだから。

女優A、立ち上って、女優Cのブランデーを持ってくる。

それぞれの手にグラス。つく。

と、女優B、二人を手で制して、プレイヤーにかけよる。

レコードを選んでかける。

音楽、流れ出す。

女優A さあ、乾杯しましょう。あたしたちの長い長い夜のために。

女優B あたしたちの終りなき稽古のために。

女優D そして、あたしたちのもうやってこない眠りのために。

音楽、変調する。

三人、いつのまにか寄りそうように立つ。

女優B (マーシャのセリフ) ……まあ、あの音楽のひびき……あの人たちはたっっていく。わたしたちだけがここに残って、またわたしたちの生活をはじめのだけ、生きていかなければ、……生きていかなければ……

このセリフとうらはらに、徐々に明りが落ちていき、三人の姿はまさに蒼白き死人のそれに変貌していく。

女優D (イリーナ) やがて時がくれば、どうしてこんなことがあるのか、なんのためにこんな苦しみがあのか、みんなわかるのよ、でもまだ当分はこうして生きていかなければ……働かなくちゃ、ただもう働かなくちゃ……もうじき冬が来て、雪がつもるだろうけど、あたし、働くわ、働かなくちゃ……

女優A、女優BとDを抱きよせて、

女優A (オリガ) 音楽はあんなに楽しそうに鳴っている、あれを聞いていると、生きていきたいと思うわ！ まあ、どうだろう、やがて時がたつと、わたしたちも永久にこの世にわかれて、忘れられてしまう。わたしたちの顔も、声も、何人姉妹だったかということも、みんな忘れられてしまう。(三人の姿、闇にかき消されていく) ああ、かわいい妹たち、わたしたちの生活は、まだお仕舞いじゃないわ。生きていきましようよ、音楽はあんなに楽しそうに鳴っている、あれを聞いていると、もう少ししたら、なんのためにわたしたちが生きているのか、なんのために苦しんでいるのか、わかるような気がするわ……それがわかったらねえ、それがわかったら……

4

すでに楽屋は闇の中にとざされてしまっている。

と、微かな月光のなかに草の原が浮ぶ。

草の原に、墓標のように立つ、無数の鏡たち。

鏡がつぶやく。

「はなやかな町……

まずしい都……

囚われのころ……

あでやかなる姿……
あでやかなる姿……」

* 「かもめ」 「三人姉妹」 チェーホフ （中央公論社・神西清、池田健太郎訳）
「マクベス」 シェイクスピア （新潮社・横山有策訳）白水社・小田島雄志訳）
「斬られの仙太」 （学芸書林・三好十郎作） その他 「プーシキン詩集」、
「草の葉」 「マヤコフスキー選集」などを引用させていただきました。

底本… 『清水邦夫へ』 署名人／ぼくらは生まれ変わった木の葉のように／楽屋』

ハヤカワ演劇文庫、ハヤカワ書房

2006（平成18）年1月20日印刷

2006（平成18）年1月30日初版

※ 権利者のご要望により誤植を修正しました。